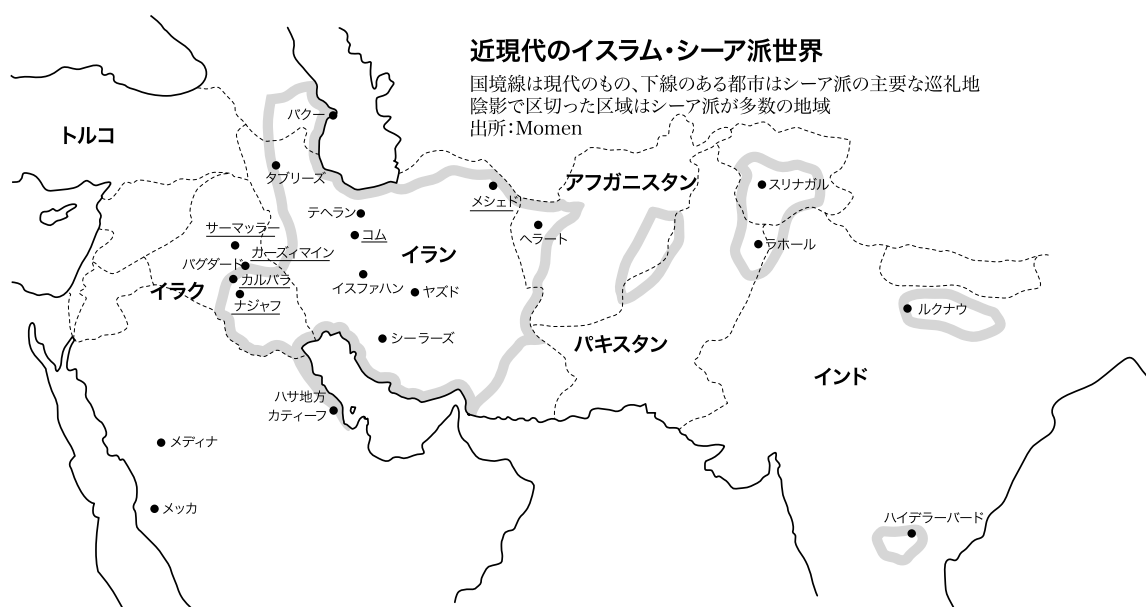


シャイヒー派のリーダー、 サイド・カーズィム・ラシュティー

森川孝典

はじめに



その名が示す通り、アラビア半島東部のシーア派の地、ハサ地方出身のシャイフ・アフマド・アハサーイー Shaykh Ahmad al-Ahsâi (1753-1826) は、1772年20歳の頃、イラク聖廟都市に移住し、ウスール派の環境の中で神学を勉強し始めた。やがて学者としての名声を得て、40代で支持者を持ち始めた。しかし、その教義が正統派から逸脱していることを理由に破門扱いとなり、カーズィム・ラシュティー Kâzim Rashtî (1798-1843) の時代に、12イマーム派のなかで独自のグループ、シャイヒー派を形成していく。

当時のシーア派聖職者の世界は、アフバール派との激しい対決を経て、ウスール派がほぼ優位の態勢を固めた時代であった。ウスール派とは、法源として4

つの原則（ウスール）を重んじることからそう呼ばれたのだが、コーラン、ハディース、イジュマーのほか、理性を取り入れた結果として、ウスール派は法解釈においてムジュタヒドに大きな権限が与えられることになった。それに対して、シャイヒー派は、ムジュタヒドの絶対的な権限を認めず、あくまで12人のイマームが最高権威であるという立場から、イマームから直接授かった知識の持ち主である唯一の指導者の権威、「完全なシーア派教徒」al-shî î al-kâ mil なる存在の権威を主張した。

さて、12イマーム派の聖職者の中で異端視されたこのシャイヒー派であるが、その教義は聖職者間にもまた民間にも大きな影響を与えた。ひとつは一部のシーア派教徒の間にマフディ再臨のための準備を促したこと⁽¹⁾、いまひとつはウスール派のマルジアエ・タグリード理論の新たな展開に道を開いたのである。すなわち、シャイヒー派の中から別派としてマフディー再臨を待つグループ、後、世界的に信者を獲得するバーク教、さらにバハーイー教が誕生していく。また、シャイヒー派の「完全なシーア派教徒」が示唆となり、ウスール派において、「タクリードの最も見識ある源」、マルジアエ・タグリード・アラム marja -i-taqrîd al-amm という地位が作られ⁽²⁾、さらにナーイブ・ルアムm nâ ib al- amm という概念が生み出されるに至った⁽³⁾。

このようにシャイヒー派が果たした歴史的役割は非常に大切で大きいといえよう。ところで、シャイヒー派信奉者にマフディ再臨を点火したとされるのは2代目のカーズィム・ラシュティである。カーズィムはウスール派からシャイヒー派の形成、さらにバーク教の形成へと展開する中心にいるとっていい人物ではないだろうか。本稿はそのカーズィムについての覚書である。

1. シャイフ・アフマド・アハサーイーとサイド・カーズィム・ラシュティ

(1) ワッハーブ派の運動とシーア派

ワッハーブ派は、コーランとスンナを厳しく守り、イスラムからの逸脱や間

違った考え方の追放を掲げ、18世紀に登場したイスラム改革派で、運動は19世紀、一度挫折したが20世紀にイフワーン運動として再生し、現在サウジアラビアの国教となっているスンニー諸派のひとつである。ワッハーブとはその始祖の名に因む。アブドゥル・ワッハーブ(1703 - 92)は、イブン・タイミーヤの思想の影響を受け、ビドアの除去、迷信の排斥を掲げ、聖木などを切り倒したりした。やがて、大部族のひとつサウド家の庇護を受けた。

ワッハーブの掲げた主たる原則は次の通りである。

イ．民俗的スーフイズムの否定

ロ．シーア派を初め、正統派からはずれた思想すべての否定

ハ．法源をコーランとスンナのみ認める⁽⁴⁾

この厳格な宗派が19世紀前半、メッカ巡礼者を通して、イスラム世界各地に伝播し各地で改革の嵐が吹き荒れることになったのみならず、シーア派世界への攻撃が始まるのである。

18世紀末にはハサ⁽⁵⁾が攻撃され、1801年にはカルバラが攻撃された。カルバラでは約5000人のシーア派教徒が殺された。またフサインの墓などのドームが破壊され、街が略奪された⁽⁶⁾。

(2) アハサーイー

アラビア半島ネジュド地方のハサ地方は歴史上シーア派の中心的地域のひとつであった。ワッハーブ派によって、ハサが攻撃対象になると学者は多くがハサを逃れ、イラクのシーア派の聖廟都市あるいはイランに避難した⁽⁷⁾。アハサーイーはそのハサで1753年に生まれた。1772年(ないしは1790年代ともいわれるが)イラクの聖廟都市へ旅たった。聖廟都市ではサイイド・マフディ・タバータバーイー Sayyid mahdi tabâtabâ iなる学者などの教えを受けた。20年ほどした時、疫病が流行ったので、一時ハサに戻り、1797年、今度はバス

ラに滞在した。そして1806年にはイマームが眠るイランの聖地への巡礼を思い立った。イランでは、8代目のイマーム、アリー・レザーが眠る聖地マシュハド、当時学問のセンターであったヤズド⁽⁸⁾などを中心に22年まで滞在した。ヤズドでは著名な学者が多く、友好を深めた。また、カージャール朝の君主らの庇護を受けた。アハサーイーはイランで著名な神学者として名を馳せたが他方で、1822年頃、カズヴィーンの著名な学者ハジ・ムッラ・ムハンマド・タキー・バラガーニーにより、異端の廉で、破門の宣告を受け、それがきっかけとなって、12イマーム派聖職界から追放の憂き目にあう。以降、彼の勢力は減退してしまう。そしてアハサーイーはイラクに戻ろうとしたが、イラクは危険ということで、メッカに向ったものの、途中で、病のため1826年没した⁽⁹⁾。

(3) ラシュティー

師のアハサーイーの後、シャイヒー派を継いだサイイド・カーズィム・ラシュティーは、イランのレシュトで1798年、3代イマームホセインの末裔に当たる名門に生まれた。幼少の時は、夢見がちで、異郷に強いあこがれをもったが、家族の理解がなく旅は実現しなかった。やがて預言者の娘ファートィマが夢に現れ、シャイフ・アフマド・アハサーイーの存在、彼の人と成り、そして居所、ヤズドを教えた。この夢により、ラシュティーはヤズドに向かい、アハサーイーから教えを受けた。そして、アハサーイーの勧めでイラクの聖廟都市に落ち着くことになった⁽¹⁰⁾。

彼は、若い時は著名ではなかったが、カルバラに移動してからは強い指導力を発揮した。師はシャイヒー派とウスール派との区別をあいまいにしていた。それに対しカーズィムはその区別をはっきりさせ、要するに派閥としてのシャイヒー派の結成に尽力した。また、学者の反対にもめげず師の教えを広めた⁽¹¹⁾。こうして、カルバラではウスール派からシャイヒー派が分派し、多数派をカズヴィーニーが率い、少数派をラシュティーが率いた。

カーズィムの時代にシャイヒー派はさらに人気を得、イランや南部イラクでは村や町全体がシャイヒー派となったほどであった。またカージャール朝の廷臣や王子たち、例えばアッバス・ミルザー（カージャール朝第2代君主ファトフ・アリー・シャーの子）がシャイヒー派を支持した。また、シャイヒー派を批判したバラガーニーの意見を受け入れることのできない、イランやイラクの聖廟都市における正統派のシーア派ウラマーの支持も得た。さらにシリア、アラビア半島、インドでも支持を得た⁽¹²⁾。

インドのルクナウ出身のサイイド・アリー・ナシーラーバーディ Sayyid Ali Nasîrâbâdi (1786-1843) はサイイド・カーズィムの下に留学し、やがてインドでもシャイヒー派が広まった⁽¹³⁾。

ところで、シャイヒー派はイラク、イランを中心に現在も存在している。信徒数はイランに20万、イラクと湾岸諸国に30万で、それぞれマイノリティとして存在している。また、シャイヒー派の多くいる都市としては、キルマーン、タブリーズ、ホラムシャフル、アバダン、テヘラン、シーラーズなどがある⁽¹⁴⁾。

ではシャイヒー派の教義の特徴は何だろうか。

2. シャイヒー派の教義

シャイヒー派の教えは、啓示と理性、神学と哲学の調和を図ろうとしたところに大きな特徴がある。中心的教えは、シーア派は導きの無謬の源への帰還により知的な刷新から純化すべきである、という点だ。シーア派が帰るべき源とはコーラン、ハディース、そしイマームだけである。だから、例えば、コーランの章節において-その多くは意味が明らかであるが-意味が分からないものは理性とイマームとの親密な霊的交わりに由来するシャイフの秘教的知識の助けで解釈されるべきであるとする。神の本質は人間が到達し理解することはできないので、聖なる属性や教えに近づくには取り成しが必要である。これらの取り成しは神でも人間でもない。これらの取り成しこそ預言者やイマームで

あった。これは原初的意志の創造的代理人、プラトンのいう工作者に当たる。神は近づきがたいゆえ、これら神聖で、無謬で罪のない存在が人類のための神の恩恵となる。それこそが被創造物の唯一の避難場所となる⁽¹⁵⁾。

以上からシャイヒー派独特の第4番目の支え al-rukṅ al-râbi という教義が出てくる。伝統的にシーア派はタウヒード（神の唯一性）、ヌブツワ（予言）、イマーム（イマーム性）の3つが基礎であったが、シャイヒー派は四つ目を加えた。「お隠れ」状態のイマームと信者の間に恩恵の代理人として行動することのできるものを置いた。シャイフ・アフマドやサイド・カーズィムこそ直接の弟子たちによって第4の支えの保持者とみなされた。

シャイヒー派のリーダーたちのイマームとの関係はシャイフ自身が著作で述べている。すなわち、シャイフ・アフマドは様々なイマームや預言者と会見し、イマームたちから免許皆伝（ijâzât）やまたイマームと直接相談する時の特別の言葉を受けたりした、一連の夢想的経験を述べている。彼は幽玄のなかでイマーム・ハサンや預言者の唾液を吸収したとも述べている。

また、審判の日の見解も独特である。審判の日にすべての被創造物は神の御元に戻るのではなく、原初的意志に戻る。つまり、復活は肉体的な身体で起こるのでなく、物質界と天界の間にある想像的世界、フルカルヤ - hûrqalyâ の領域に存在する、名状しがたい身体で起こる。このように各人は二つの身体をもち、ひとつは物質界にある身体であり、もうひとつはフルカルヤーに身体をもつ⁽¹⁶⁾。同じく、天国と地獄も2つずつある。それぞれこの世にひとつ、あの世に一つある⁽¹⁷⁾。

さらに、預言者ムハンマドの夜の旅については、大方のイスラム教徒にとっては、ムハンマドはブーラクという想像上の動物に乗って、身体ごとエルサレムに運ばれたことになっているが、アハサーイーは肉体的な身体で起こったのではなく、ムハンマドの名状しがたい身体で起こったのだと主張した。

この審判の日とムハンマドの旅についての見解は、シーア派神学の正統派か

ら異端と非難された点であった⁽¹⁸⁾。

3．聖廟都市とカーズィム・ラシュティー

(1) 19世紀のイラクの聖廟都市

19世紀のイラクはオスマン帝国の支配領域で、聖廟都市ナジャフは、バグダードから派遣されたスンニー派のハキームに支配され、廟の保護はハキームが監督するムタワッリーの管轄であったが、それらスンニー派の支配は形式的で、大半のシーア派住民は宗教的自由を享受した。それが可能であったのは巡礼の収入があるがためであった。

カルバラも事情は同様であった。形式的にはナジャフ、カルバラはバグダードが支配権をもっていたが、実際はナジャフもカルバラも地方の名士が影響力をもった⁽¹⁹⁾。宗教的リーダーは街だけでなく、周辺地域にも大きな影響力をもった。周辺地域は遊牧勢力が群居していたが、聖廟都市の聖職者による布教が功を奏してシーア派が増えつつあった⁽²⁰⁾。

カルバラの事実上の実権を握ったのは、預言者の子孫を名乗るサイド、あるいはウラマー、モスクのハティーブ、さらにダルウィーシュなどであった⁽²¹⁾。カルバラに居をおいたカーズィムはウラマーとしてまたサイドとして名士になったわけである。このことは後述する。

さて、19世紀初頭、ナジャフのリーダーはアッバース・アル・ハッダードなる人物だった。彼は聖職者ではなかったようだが、当時の指導者に必要とされた要件を満たしているようだ。彼は要塞を築き、農業を奨励し、ナジャフ市内のみならず周辺地域の治安を確保した⁽²²⁾。つまり、再三述べているように、バグダードの総督らの勢力は南東部都市が町の防御を依頼できるほど強力ではなかったため、ワッハーブ派の攻撃を前にナジャフの指導者はこのように自らが備えたのである。

さて、宗教的指導者わけでもサイドの地位にある者が人々に尊敬されたり、

指導者となったりするのは歴史上よく見られることだった⁽²³⁾。サイドという立場の人間がリーダーとなるいろいろな場合を次に見てみよう。

(2) サイド

先に触れたようにサイドとは預言者の血縁を引く人々である。特権階級には違いないが、時代が下るにつれ、賤業にも従事したようだ。ただ、威光は絶大で、それが尊崇を受けるもとであり、利用されるもとにもなった。サイドは部族のシャイフに請われて、他部族との戦いや和平の使者に立つことがあった。サイドは病を癒し、旱魃を救い、幸福を祈る役目もした⁽²⁴⁾。

イスラム世界では、他の地域と同様、サイドのような神聖さ、尊厳さをもった集団もしくはかような家族との婚姻は名誉あることとされた。またサイドはしばしば結婚や新生児の祝福を求められた⁽²⁵⁾。シーア派では、フムスとザカートをウラマーが徴収する権利があった。ウラマーはそれを元手にサイドを養った⁽²⁶⁾。サイド家とウラマー家はしばしば姻戚関係を結んだ⁽²⁷⁾。

なお、サイドは権威の象徴として、頭に緑色のターバンもしくは黒いターバンを巻いていた⁽²⁸⁾。

(3) 聖廟都市周辺への布教

ナジャフやカルバラの聖職者は周辺地域への布教に意を用いた。先に述べたように、18世紀からサウジアラビアでワッハーブ運動が展開したことで、その影響下にある遊牧民が北上し、ナジャフなどユーフラテス川沿いの諸都市をしばしば略奪するようになった。遊牧民のなかには都市近辺に定着する部族も出てきた。ナジャフなどの聖職者はワッハーブ派に対抗するため、周辺の部族をシーア派に改宗させようと努めた。

春から秋にかけて聖地に来る遊牧民に改宗を呼びかけた。また、部族にムーミンという布教者を送り込んだ。ムーミンは神学校を出て、ムジュタヒドの代

理として働いた下級聖職者だが、なかには不正をし、農民を食い物にしたムーミンもいたという⁽²⁹⁾。聖職者が階層化された点についてはシーア派の特色として留意しておく必要がある。

ともあれ、当時まで、遊牧民は概して無明の民であった。その遊牧民がイスラム法を知り、シーア派の儀礼、アシュラー、クリー qry、を知ったのはこうしたことがきっかけだった。なお、クリーとは、イスラム暦1月、シーア派3代イマーム・ホセインの死を追悼する行事の一種であるが、家庭で特に婦人が主催して下級の聖職者ムツラを呼んで行われるものである⁽³⁰⁾。

なお、イラク南部地域におけるアシュラーであるが、いつから始まったか時期に関しては定説がない。Ferneaによれば、アシュラーはオスマン帝国下に始まった。彼女の説明では、イラクを支配したのがスンニー派のオスマン帝国だったことから、シーア派が対抗的にアシュラーをするようになった。しかし、オスマン帝国がイラクを支配し始めた初期か、後期かはわからない。それはともかく、19世紀の改宗者にとってはアシュラーの行事は魅力に映ったようだ⁽³¹⁾。

以上のような事情で、イラク南部の都市周辺部のシーア派改宗は比較的新しい時代の出来事だったようである。それがため、イラク南東部では宗教機関が少ないといわれている。Batatuによれば、1947年の人口調査では、南部全体で宗教的機関（モスク、マドラサ、フサイニーヤ）は39しかなく、人口37,000人に一つで、これはイラク北部のクルド人のスンニー派地帯の7,763人に一つと比べると著しく低い数値である、といっている⁽³²⁾。

(4) 聖廟都市に流れる人々

イラク南東部の聖廟都市は、世界から人々が流れてくる場所でもある。遺体を持ち込むのはつとに有名なことであるが⁽³³⁾、その他、巡礼や学問の旅目的で、または難を逃れてやって来る人、無法者も含めて、が多かった。かような人々が隣国のイランやパンジャブ、そしてインド、カシミールなど世界各地からやっ

てきた⁽³⁴⁾。

聖地が避難所としても機能していた点に関して、バグダードについて、次の指摘がある。バグダードに通称シャイフの街区という地区があった。そこには、神秘主義教団のカーディリー教団の聖者廟があり、これは区のシンボルとなって区民から敬愛されていたのだが、また、サイイドの長であるナキーブ・アシュラーフが地区に住んでいた。住民の多くは浮浪者、逃亡している犯罪者であり、いわば聖人の加護下に駆け込んできた輩であった。避難所として機能していたこのような街区は、サイイドクラスが享受する法的免責性と結びついていたようである。バグダードのパシャも不法者とその守護聖人の巣にむやみに介入しなかった⁽³⁵⁾。カルバラも同様なことが言えよう。

(5) カルバラの支配集団

当時のカルバラの指導者はサイイド・ワッハーブなる人物で、街の名門の一人だった。その下に武装した集団がいて、それは先ほど述べたような人々の集まりだった。すなわち、ヤールマーズ、yârmâz といわれた集団で、それは、奴隷、盗賊の流れ者、イラク総督の支配を逃れてきた者から成っていた、という。彼らの集団のなかの一つは侵入という意味のガーラから、アル・ガーラティーと呼ばれた、ともいう。まさに烏合の衆であった。そして彼らは巡礼者への税によって生計を立てていた。巡礼者を相手に、自分もその一人であったのだが、ヤールマーズの悪さから守るために巡礼者一人につき、ヤールマーズが一人付いたという⁽³⁶⁾。なお、スレイマン総督の時代(1780-1802)年毎のイラン人を初めとする巡礼者の数について、バグダード滞在のフランス人は3万と推測し、バグダード政府は数百万ピアストルを稼いだが、それ以降は1万人くらいに減った、といっている⁽³⁷⁾。

そして、ガーラティーの1842年当時の指導者ザイーム za îm は、サイイド・イブラーヒーム・アル・ザーファラーニー、Sayyid Ibrâhîmal-Za farânî とい

ウイラン人とアラブ人の混血であった。

ヤールマーズはいくつかの集団に分かれ、抗争を繰り返し、流血沙汰がよくあり、他の市民をかなり苦しめた。聖職者もそれを憂えたが、聖職者は抗争を利用して自分の支持者を増やしていったという面もあったようだ。

ウスール派からシャイヒー派が分裂した時、ヤールマーズは二分され、一方をサイド・カーズィムが、他方をサイド・イブラヒム・アル・カズヴィーニーが率いたという⁽³⁸⁾。1830年代、ライバル派閥がカーズィム・ラシュティーの命を何回も狙った⁽³⁹⁾。

1843年、バグダード総督ナギーブ・パシャはカルバラの秩序を回復しようと、街の指導者に相談を持ちかけた。相手はラシュティー、ラシュティを支持したカージャール朝のファトフ・アリー・シャーの息子の一人、街ではジッル・スルタンといわれたが、そしてハキームとして派遣されていたサイド・ワッハーブであった。ナギーブ・パシャは、治安の回復のため500人の軍を駐在させようとした。すると、サイド・ワッハーブ、カーズィム・ラシュティらが反対し、壁の上にさらに防御壁を置き、街周辺のアラブに対し、街の防御に立ち上がるよう呼びかけた。

やがて、ラシュティらは形勢不利と見て、人質の提供の代わりにバグダード軍の撤退を申し入れたが、交渉は不調に終り、再び交戦となった。カルバラ市民の抵抗は一步も引かなかった。カルバラの市民を助けようとイラン軍が出動の準備をしさえした。しかし、1843年バグダード軍の組織力の前にカルバラ軍は敗れ去った⁽⁴⁰⁾。

この市街戦においてラシュティーの家は人々の避難先となった⁽⁴¹⁾。ラシュティーが教えを広めたのは以上のような下層の人々が多かった。だから、ラシュティーの死後、彼らの多くはバーク教に改宗したのである。もっとも、バーク教は後、職人からも商人からも改宗者を得ることになる⁽⁴²⁾。

4 . バーブ教、バハーイー教

サイイド・カーズィム亡き後の混乱の中、バーブ教が出現するまでの過程を簡単にみておこう。まず、カーズィムの高弟のひとり、ムッラー・フサイン・ブシュルーイー Mulla Husayn Bushrûî は、聖職者による後継者争いをよそ目に南イラン出身の無名のサイイド・アリー・ムハンマド・シーラージー（1819-50）に忠誠を誓う。シーラージーはお隠れのイマームへの門バーブ Bâb としてのメシア的地位に基づいて権威を主張した⁽⁴³⁾。これがバーブ教の始まりである。

シーラーズ（イランの都市）の商人であったシーラージーは、1839 か 40 年、20 歳の時、店を畳み、聖廟都市に留学し、1 年間とどまり、サイイド・カーズィムのクラスに出席した。1840 年か 41 年にシーラーズに戻り、結婚した。43 年もしくは 44 年に夢を見て、3 代イマーム・フサインの切断された頭部を見、その血を数滴飲み、恩恵からなるほどと思わせられる章句と力強い祈禱に胸が一杯になった。そして、神の精神が魂にしみ込み、魂が一杯となった。神の啓示の神秘が彼の目の前に開示された⁽⁴⁴⁾。

サイイド・カーズィムの死後多くのシャイヒー派の人々は、聖なる導きを求めてしばらくなりを潜めたが、政治への反応が鈍いリーダーに不満のシャイヒー派はバーブ教に改宗した⁽⁴⁵⁾。バーブは、マフディイ再臨を準備する聖なる戦争を呼びかけた。おりしも、イスラム暦 1260 年 12 代イマームがお隠れ後、丁度千年を過ぎたところだった。1845 年（イスラム暦、1261 年）しかし、イマームは再臨しなかった。この時点でバーブ教は一旦は衰退する⁽⁴⁶⁾。しかし、再び態勢を持ちなおし、マフディイ到来のための聖戦が呼びかけられ、コーランとイスラム法の廃棄が告げられた。48 年からイランの各地で武装蜂起があり、牢獄が襲撃され、借金負債者が解放された。だが、大半が惨殺され、50 年にはバーブはタブリーズで処刑された⁽⁴⁷⁾。

そしてバーブ教徒のひとり、ミールザー・ホセイン・アリーは自らバーブが予言した「神が現し給う者」であると宣言し、バハーイー教が始まった⁽⁴⁸⁾。

おわりに

シャイヒー派の教義はバグダードのムフティー、アル・アルーシー、バグダード総督、アリー・レザーのような高貴の支持も得た、という。また、シャイヒー派独特の論争的な教えは独特で信頼できる弟子にだけ教え、異なったレベルの聴衆には描き方や話し方を変えるという共通の秘教的戦略を採用していたという⁽⁴⁹⁾。さらにインドから来た、留学生などに免許状を授けた。

サイド・カーズィムは集団に方向性を与え、師の教えを熱心に教え広めた。人々はその道、方法を準備し始めないとマフディーの帰還はおぼつかないと訴えた⁽⁵⁰⁾。だから、人々はマフディーの到来のため積極的になった。その意味でシャイヒー派は、人々に政治に対する積極的態度を促したといえるだろう。また、タクリードの最も見識あるマルジアエ・タグリード・アアラム、という地位も、「完全なシーア派教徒」というアハサーイーの理論をラシュティが広い範囲に浸透させたことによって、生み出されていった。

註

- 1) Arjomand:254
- 2) Batatu:12-13
- 3) Momen:228
- 4) 湯川 : 224、「ワッハーブ派」「新イスラム事典」
- 5) Oppenheim:136: ワッハーブ派が台頭する前ハサはハーレド部族が支配していた。現代のハサについては、サウジアラビアへの併合とホメイニ革命後のハサの動き、それに対するサウジアラビア政府の弾圧に関する研究がすでにある一方で、オアシスを利用したナツメヤシ栽培など農業についての興味深い研究もある。前者については Goldberg を、後者については Vidal を参照せよ。

- 6) Goldberg,232、バスブース :65、Habib:9
- 7) Momen:129,143-45
- 8) ヤズドは現在バハーイー教徒の多い町として知られているが、いろんな意味でイランの縮図だとして Fischer,Abedi : 222-250 が注目している。シャイヒー派の祖アハサーイーがヤズドに長く滞在したことも問う価値があろう、と思われる。
- 9) Corbin1972:232
- 10) op.cit.
- 11) Smith:9
- 12) Smith:9,10
- 13) Cole:186,87 : なお、シャイヒー派を、ポシュテーサリー pusht-i sarî、正統派をバーラーサーリー Bâlâ-sarî 派、ともいう。前者は頭の後ろの人々、頭の上の人たちを意味するが、シャイヒー派の人たちはイマームを敬愛するあまり、廟を訪問しても足元に留まり、巡回しない、ことからそう言われた、という。Smith:p200、Momen:227
- 14) Momen:231
- 15) Smith:10-11
- 16) Momen:227
- 17) Smith:12, コルバン : 1974 : 83
- 18) Smith:12
- 19) Nieuwenhuis:31
- 20) 阿部 : 161、Batatu:41-42
- 21) Nieuwenhuis:31
- 22) Nieuwenhuis:31-32
- 23) クルディスタンのサイドについては Bruinessen : 206-8 が詳しい。
- 24) 阿部 :162-63

- 25) Momen:235
- 26) Momen,207
- 27) Momen:199
- 28) Thesiger : 173
- 29) 阿部 : 161、Batatu:41-42,85-86,Momen:203-6
- 30) qry に関する詳細な記述は Fernea を参照せよ。
- 31) 阿部 :163,64
- 32) Cardri:163
- 33) バーンベリー : 96-97
- 34) Ta rîkh al- Irâq ; 93
- 35) Nieuwenhis : 64
- 36) Ta rîkh al- Irâq ; 89、Lorimer ; 1349
- 37) Nieuwenhis : 49
- 38) Ta rîkh al- Irâq ; 89、Lorimer ; 1350
- 39) Cole,186-87
- 40) Ta rîkh al- Irâq ; 89-91、Lorimer ; 1350-1355
- 41) Corbin1972 : 234
- 42) Arjomand:255
- 43) Smith:13
- 44) op.cit.
- 45) Arjomand:252-253
- 46) Smith:15-6;Fischer,Abedi:230
- 47) 「バーク教」「新イスラム辞典」, Fischer,Abedi:230
- 48) 「バーク教」「新イスラム辞典」
- 49) Smith:10
- 50) Fischer,Abedi:230

参考文献

- Nawâr, Abd al- Ajîz Sulayman,1968,Ta rîkh al- Irâq al-Hadîth.Dar al-
Kitab al- Arabi
- Nawâr Abd al- Ajîz Sulayman,1968,Dâud Bâshâ Wâlî Baghdâd. Dar al-
Kitab al- Arabi
- 阿部重夫、2004 イラク建国 岩波新書
- Ahmad,Akbar S.1988 The mulla of Waziristan:leadership and Islam in a
Pakistan district.In Katherine P. Ewing ed. Shari at and ambiguity
in South Asian Islam,Univ.of California Pr.pp180-202
- Arjomand,Said Amir 1987 The shadow of god and the hidden
imam:religion,political order,and social change in shi ite Iran from
the beginning to 1890.The Univ.of Chicago Pr.
- バスブース、アントワヌ 2004 サウジアラビア : 中東の鍵を握る王国
集英社
- Batatu,Hanna 1978 Old social classes and revolutionary movement in
Iraq:a study of Iraq s old landed classes and commercial classes
and of its communists,ba thists and free officers,Princeton.
- Batatu,Hanna,1986 Shi i organizations in Iraq:al-Da wa al-Islamiyah and
al-Mujahidin. In Juan R.I.Cole and Nikki Keddie ed. Shi ism and
social protest.Yale Univ.Pr.pp179-200
- Bayat, Mangol 1991 Iran s first revolution shi ism and the constitutional
revolution of 1905-1909.Oxford Univ.Pr.
- Bruinessen,Martin van,1992 Agha,sheikh and state:the social and
political structures of Kurdistan.Zed Books.
- Committee Against Repression and for Democratic Rights in Iraq(Cardri)
Saddamm s Iraq:revolution or reaction,Zed

- Corbin, Henry 1972 *En islam iranien*, vol.4 Gallimard
- コルバン 1974 *イスラム哲学史* 岩波書店
- Farhi, Farideh, 1990 *Ideology and revolution in Iran*, *Journal of developing Societies*, vol. VI, pp.98-112
- Fernea, Elizabeth, 1969 *Guests of the sheik: an ethnography of an Iraqi village*. Anchor Books.
- Fischer, Michael M., Abedi, Mehdi, 1990 *Debating muslims: cultural dialogues in postmodernity and tradition*, The Univ. of Wisconsin Pr.
- Goldberg, Jacob 1986 *The shi'i minority in Saudi Arabia*, In Juan R.I. Cole and Nikki Keddie ed. *Shi'ism and social protest*. Yale Univ. Pr. pp.230-246
- Habib, John S. 1978 *Ibn Sa'ud's warriors of Islam: the Ikhwan of Najd and their role in the creation of the Saudi Kingdom, 1910-1930*. Brill.
- Halm, Heinz, 1991 *Shiism*, Edinburgh Univ. Pr.
- Hansen, Henny Harald 1968 *Investigations in a shi'a village in Bahrain*. The National Museum of Denmark.
- 近藤信彰 1990 *バーク教徒のシュイフ・タバルスィー蜂起* 日本中東学会年報 第5号 pp.309-339
- Lawson, Fred H. 1992 *The Social origins of Egyptian expansionism during the Muhammad Ali period*. Columbia Univ. Pr.
- Lorimer, J.G. 1908-15 *Gazetteer of the Persian Gulf Oman and central Arabia*, vol.1, part 1 Culcutta.
- Martin, Vanessa 1989 *Islam and modernism: the Iranian revolution of 1906*. L.B. Tauris.
- Momen, Moojan 1985 *An Introduction to shi'i Islam: the history and*

- Doctrines of twelver shi'ism. Yale Univ. Pr.
- Nieuwenhuis, Tom 1982 Politics and society in early modern Iraq: mamluk, tribal shayks and local rule between 1802 and 1831. Martinus Nijhoff
- Starkey, Brigid A. 1990 Islam, culture and revolution: the case of Iran, Journal of Developing Societies, vol. VI, pp87-97
- Sweet, Louise E. 1971 The Arabian Peninsula. In Louise L. Sweet, editor with a foreword by William D. Schorger and chapters by Harold B. Barclay, John Gulick, Robert A. Fernea, Louise E. Sweet, and Alex Weingrod. HRAF Press.
- Thesiger, Wilfred 1980 The last nomad: one man's forty year adventure in the world's most remote deserts, mountains and marshes. E.P. Dutton
- 湯川式 1985 イスラム改革思想の流れ - ハンバル派小史 講座イスラム1 イスラム・思想の営み (中村廣治郎編) 筑摩書房, pp207-232
- ヴァーンヴェーリ、A. 1977 ペルシア放浪記: 托鉢僧に身をやつして 平凡社
- Wiley, Joyce N. 1993 The Islamic movement of Iraqi shi'as. Lynne Rienner.
- Vidal, F.S. 1970 Date culture in the oasis of al-Hasa, In Readings in Arab Middle Eastern Societies and Cultures ed. by Addulla M. Lutfiyya, Charles W. Churchill, Mouton, pp205-217
- Von Oppenheim, Max Freiherr, 1952 Die Beduinen. Bnd Die Beduinenstämme in Nord-und Mittelarabien und im Irak. Bearbeitet und herausgegeben von Werner Caskel. Otto Harrassowitz.